[9]

氏　　名	立石大樹（たていしだいき）
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	文博第 232 号
学位授与の日付	平成 27 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	三代集の基礎的研究
論文審査委員	主査　教授　田中　登
	副査　教授　山本登朗
	副査　教授　関屋俊彦

論文内容の要旨

本論文は、古今・後撰・拾遺の三代集の基礎的問題について論じたものである。論文の構成は以下のとおり。

序章　本論文の趣旨および要旨
第一章　『古今和歌集』の研究
　一　伝藤原公任筆『古今和歌集』考
　二　伝藤原家隆筆六半切『古今和歌集』考
　三　伝九条兼実筆六半切『古今和歌集』考
附　鎌倉切『古今和歌集』考
第二章　『後撰和歌集』の研究
一　雲州本『後撰和歌集』考
二　伝冷泉為尹筆四半切『後撰和歌集』考
三　伝二条為藤筆四半切『後撰和歌集』考
四　角倉切『後撰和歌集』考
五　伝坊門局筆『後撰和歌集』考
第三章　『拾遺抄』『拾遺和歌集』の研究
一　小松切『拾遺抄』考
二　関西大学総合図書館蔵　異本『拾遺和歌集』考―上巻について―
終章にかえて

第一章「『古今和歌集』の研究」では、従来流布の定家本とは系統の異なる写本や古筆切を取り上げ、その本文上の性格を論じている。一の伝藤原公任筆本は、新院御本の影響下にあることを指摘。二の伝藤原家隆筆六半切は、元永本の系統を基に、他本と接触したものであると結論づける。三の伝九条兼実筆六半切は、流布本以前のどの系統にも属さない本文であることを指摘。附の鎌倉切は、これまた元永本の系統である可能性を持つことを論証した。

第二章「『後撰和歌集』の研究」でも、第一章と同様に、従来流布の定家本とは異なる異本系の写本・古筆切を取り上げ、俎上にのせる。一の雲州本は、未整理な草稿本的性格がきわめて濃い、という先行研究を、いくつかの例を挙げながら確認する。二の伝冷泉為尹筆四半切は、前述した雲州本と完全に本文が一致することを新たに指摘。三の伝二条為藤筆四半切は、系統未詳ながら、流布本とは大きく異なる本文を有していることを指摘。四の角倉切は、諸伝本の中では、どの系統にも属さない、新出の系統であることを論証。五の伝坊門局筆本は、前半と後半とでは、若干性格が異なることを明らかにした上で、前半は、定家本の中でも、異本的な性格の強い無年号本との共通性が多いこと、後半は、無年号本にまでは至っていないものの、異本系統の中では、かなり定家本に近いものであることを論証し、該本が従来清輔本に近いといわれていた説に異を唱えた。

第三章「『拾遺抄』『拾遺和歌集』の研究」でも、第一章および第二章と同じく、流布の定家本とは、系統を異にする異本を取り上げ、その本文的性格について、考察を進めている。一の小松切は、拾遺抄の異本系統ながら、従来いわれていた異本系統よりは、より流布本に近づいている側面を持ち合わせていることを指摘。二の関西大学総合図書館蔵の拾遺集は、その前半部が、根本的なところでは、異本第一系統と位置づけられるものの、他系統との混態現象もかなり見られることを論証した。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

第一章の古今集を扱ったところでは、従来の研究が、ともすれば流布の定家本偏重の傾向にあったのを、そうした姿勢を見直すべく、一の伝藤原公任筆本、二の伝藤原家隆筆六半切、三の伝九条兼実筆六半切、附の鎌倉切など、いずれの場合も、平安時代はもちろんのこと、定家本成立後の鎌倉時代においてさえ、非定家本が人々によって書き写され、読まれていたことを、丹念な本文研究によって論証したものであるが、その結論は、妥当なものとして支持しえよう。

第二章の後撰集を扱ったところでは、古今集の場合と同様に、ともすれば定家本偏重になりがちな学界の風潮に警鐘を鳴らすべく、一の雲州本、二の伝冷泉為尹筆四半切、三の伝二条為藤筆四半切、四の角倉切、五の伝坊門局筆本など、その本文を具体的に検討し、いずれも、定家本の出現後といえども、世こぞって定家本一辺倒になってしまったわけではなく、平安時代以来行われていた異本系の諸伝本が、依然として健在であったことを、実例に即して論証した点は、高く評価しえよう。

第三章の拾遺抄・拾遺集を扱ったところでは、一の鎌倉期の書写になる小松切の性格を論じて、それが明らかに異本系統に属しながらも、かなりな箇所で、流布本の性格に接近していることを明確にしえたのは、従来の小松切研究を一歩進めたものと評しえよう。二の関西大学総合図書館蔵の拾遺集では、前半部を異本系統、後半部を流布本系統とした上で、その前半部については、異本第一系統をベースにしつつも、これまたかなりの箇所で、他系統との混態現象を生じていることを論証した。

以上、立石大樹氏の本論文は、従来ともすれば流布の定家本に依拠しがちであった学界の風潮に対して警鐘を鳴らすことによって、異本の価値を見直し、同時に定家本の相対化

を図ることを目指したものである。終章で、立石氏自身が述べているように、まだまだ前途は程遠い感があるが、それでも、氏の意図するところは、本論文によって、十分果たされたといえよう。

よって、本論文は、博士論文として、価値あるものと認める。